

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：34401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25460617

研究課題名(和文) 医師の利他的行動における動機探索とプロフェッショナリズム教育への応用に関する研究

研究課題名(英文) Research on motivation for altruistic behavior of doctors and application to professionalism education

研究代表者

鈴木 富雄 (Suzuki, Tomio)

大阪医科大学・医学部・特別任命教員教授

研究者番号：50343207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：プロフェッショナリズム教育の中で、利他性の高いと考えられる医師の行動や考えを明らかにするために、東日本大震災被災地に対して、医療支援に向かった医師達の動機を探索した。動機として、以下の概念が抽出された。「向社会性」、「臨床能力の力試し」、「体感欲求」、「帰属感」、「持てる者の責務」、「罪悪感」。抽出された動機はいわゆる「利他主義」という概念に単純に結びつけられるものではなく、人間としての欲求や職業人としてのジレンマなどに結びついている印象があった。プロフェッショナリズム教育において、このようなケーススタディの結果を用いることによって、具体的で実践的な学びが深まると考えている。

研究成果の概要(英文)：Professionalism in medical education has recently become a topic of interest. We conducted semi-structured interviews for doctors who went to areas affected by the Great East Japan Earthquake for medical support, principally regarding their motives. Interview data were tape-recorded and transcribed verbatim, followed by analysing it using qualitative research methods. The following concepts were extracted as motives for conducting support in disaster-stricken areas: 'prosocial orientation', 'testing clinical ability', 'wanting a physical experience', 'sense of belonging', 'noblesse oblige' and 'feeling of guilty'. The result appears that the motives were related to their desires and dilemmas as humans and professionals rather than simply to the concept of 'altruism'. Using the results of case studies will enrich concrete and practical study of the motives and attitudes of doctors conducting prosocial behaviour for both educators and learners.

研究分野：総合診療

キーワード：質的研究 利他主義

1. 研究開始当初の背景

医師不足・医師の偏在・医療崩壊、高齢化社会の到来、財政問題など医療環境は急激に変化し、医療の質を標準化するための業務も増大し、医師の仕事は複雑化かつ膨大なものになっている。厳しい労働環境の中、より負荷の少ない職場を求め大病院に移ったり、開業業務に至る医師が多くなる傾向がみられ、医師の偏在や地域間格差が特に大都市圏以外で顕著となっている。地域の病院における労働環境の悪化が、勤務医が燃え尽きて病院を「立ち去って」、勤務医不足を加速させるという悪循環となり、医療崩壊とも称される事態を引き起こしている。

医師のプロフェッショナリズムに関わる意識の変化

昨今の厳しい労働条件の中、医師自身の意識も「社会に奉仕するのが医師の責務である」という医師の責任感・利他主義などプロフェッショナリズムに関わる伝統的な役割意識からワークライフバランス重視の個人優先へと変化してきている。さらにこの個人優先の意識が、結果として医療崩壊を助長する悪循環の一因となっている可能性も出てきている。

医学教育の中での無策なプロフェッショナリズム教育の現状

実際のところプロフェッショナリズムは医学教育の中でほとんど教育されていなかった。「医師だから社会に貢献して当然である」という医師自身がこれまで自然に保持していた自覚や、ある種の特権意識から来る振る舞いが、その教育の必要性を認識させえなかった一因となっていた可能性もあるが、昨今、自然発生的なプロフェッショナリズムに関する意識は低下の一途であり、プロフェッショナリズムの涵養や教育とは、本人の資質に任せるものではなく、医師となる全ての者に対して改めて教育すべきものであるという認識への転換が必要だと考える。しかしながら現時点では、具体的に何をどのように教育すべきかについての明確なコンセンサスは専門家の中でも得られておらず、全国の医学部でも体系的な取り組みは進んでいない。

2. 研究の目的

上記の背景の中、日常診療の中で利他的行動をとる医師の動機に関連する構成概念を明らかにし、その上で医師のプロフェッショナリズムの中の利他主義に関する実践的で有効な教育ツールを開発し、有効性を評価した上で、医学教育の分野での将来的な普及を目的とする。

よって本研究では、利他性(およびそれに

関連する性質)が強いと考えられる医師の行動や考えを、明らかにするために、その一つのケースとして、2011年3月11日に発生した東日本大震災において、支援活動に入った医師にその動機を尋ね、それをナラティブな形で探索する。

3. 研究の方法

2011年3月11日に起きた東日本大震災において、被災地での医療支援に向かった15名の医師に対して、主にその動機について、個別に1時間前後の半構造化インタビューを行った。(5年未満5名、5年以上10年未満2名、10年以上15年未満4名、15年以上4名で、被災地支援を行った時期は、震災直後の1週間目から半年後まで)単独で被災地へ向かった医師は含まれず、全員が長野厚生連佐久総合病院(長野)、東京大学医学部、名古屋大学医学部、プライマリ・ケア連合学会のいずれかの支援母体の支援計画に基づいて行動していた。インタビュー内容はICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。言語データは質的分析法の一つであるテーマ分析の手法を用いて分析した。まずは3名の研究者が独立して質的分析を行って、概念を抽出した。次にその結果を持ち寄り、共通のコンセンサスを得るまで結果のInter-coder reliabilityを担保した。

なお、本研究は東京大学医学部及び名古屋大学医学部の倫理委員会の承認を受けて実施された。

4. 研究成果

インタビュー内容を質的に分析し、被災地支援活動への動機に関して、以下の6つの概念要素が抽出された。(表1)

<p>向社会性 (Prosocial orientation)</p> <p>臨床能力の力試し</p> <p>(Trial of clinical expertise)</p> <p>体感欲求 (Desire for real experience)</p> <p>帰属感 (Sense of belonging)</p> <p>持てる者の責務</p> <p>(Obligation felt as a capable person)</p> <p>罪悪感 (Feeling of guilt)</p>

表1 抽出された動機の要素

向社会性 Prosocial orientation

震災後の被災地は、日常診療の構造も破綻しており、通常の医療現場での複雑な枠組みは崩壊し、必然的に病める人やより困っている人に直接的にアプローチすることとなる。この非常時に見られる特別な状況を、人を助けることで感謝され自分が満足を得るとい

う、大きな「やりがい」が得られる場として捉えて被災地に向かった医師もあり、この要素は主に経験を積んだ中堅の医師達により表出されていた。

臨床能力の力試し Trial of clinical expertise

これは主に研修医や卒後数年目までの若手医師から表出された概念である。若手医師達の中には、自分の力が十分に通用しないかもしれないという一抹の不安を抱えながらも、被災地の現場を、研修で身につけた医師としての技能を自在に発揮し、実践的な経験を積むことのできる、まさに絶好の「臨床能力の力試し」の場と捉え、被災地支援に赴いて行った者もいたようだ。

体感欲求 Desire for real experience

まずはその場で、自分の目で見て体で感じたいという「体感欲求」は、卒後年数に関わらず広く表出されていた概念であった。これは、未知のものに対する単純な好奇心というよりは、主に「未曾有の大災害に対して、医師としてこれから何をなすべきかを感じる」ため、あるいは「現地で何が起こっているのかわからないという感覚を避ける」という意識として表出されていた。

帰属感 Sense of belonging

この「帰属感」は、そこにある思いを寄せ、支援したいと思う、属する集団範囲の決定因子のひとつと考えられるが、これも卒後年数に関わらず表出されていた概念であったが、やはり被災地域の出身者や、大学などで人生の一時をそこで過ごした医師達からは、非常に強くこの思いが感じられた。

持てる者の責務 Obligation felt as a capable person

医師という特別な職業に起因する能力が現場で必要とされていることを認識した上で、自分の能力が直接的に役に立つと考え、その能力を提供するために被災地支援に赴いた医師たちも多く、能力の提供がひとつの動機として抽出された。これは「社会的に勝る才能や技能を持つ者が社会に貢献することは当然である」という、いわゆる「noblesse oblige」の今日的な、また文化を超えた解釈と考えることができる。

罪悪感 Feeling of guilt

医師たるものは弱った人や傷病者を助ける義務があり、その能力のある自分が、この大災害時に何もしないということに対して、職業的倫理観からある種の「罪悪感」を感じていた者も多く、これは卒後年数に関わらず動機として抽出された概念であった。少し見方を変えれば、先に5つめの概念として抽出した「noblesse oblige」の核心は、元々自発的な無私の行動を促す明文化されない心

理的な自負・自尊であったはずだが、前述したように、そのような行動を医師の責務として強く意識するあまり、非常時に事を起こさない自分への「罪悪感」が生まれ、その感情の払拭が動機に繋がった医師達もいたとも言えよう。

本研究では、「向社会性」、「臨床能力の力試し」、「体感欲求」、「帰属感」、「持てる者の責務」、「罪悪感」の6つの要素を抽出した。これらは「利他主義」という概念に結びつけられるものではなく、ある意味利己的とも考えられるような個人としての欲求をも包含していた。またこれらの要素は単独で存在せず、互いに影響し、要素の大小は、医師の卒後年数や東北地域との関わりなどの背景状況の違いに、ある程度依存していると考えられた。(図1)

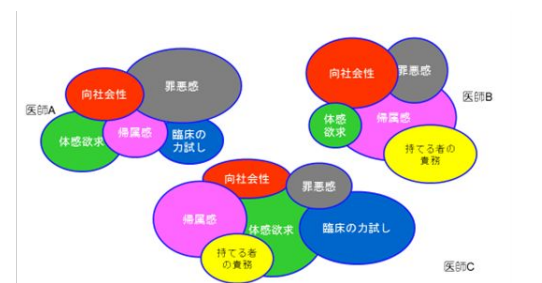


図1 個人の中で複数の動機が存在しうる

今回のように実際のケースを質的に分析することにより、利他的行為に及んだ医師の動機に関する様々な要素を具体的に抽出することが可能となり、その結果を用いることによって、ロールモデルとなり得る現場の医師の生の思いを、学習者により深く理解させることができると考える。例えば、本研究によって明らかになったナラティブをシナリオに組み込んで、それを元にグループディスカッションを行ったり、そこにロールプレイを組み合わせたことにより、学習者により興味を持って主体的に参加でき、多くの実践的学びにつながるような、医学教育ワークショップを行うことも可能となるだろう。

最終的には今回の研究結果とそれらを合わせて考え、医師の利他的行為の背景にある要素をより明確に提示することができ、それらの結果を用いて、プロフェッショナリズム教育の一つの大きな軸である利他主義の教育的方略の創出につなげていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

鈴木富雄、医師はなぜ他人のために働くことができるのか？そもそも利他的であるかと教育すべきなのか？、大阪医科大学雑誌、査読有、74.1、2015、12-18

〔学会発表〕(計4件)

SUZUKI Tomio, MATSUI Tomoko, TAKAHASHI Noriyuki, ODA Ryo, NISHIGORI Hiroshi. Why do doctors go to support people suffering from the 2011 Great East Japan Earthquake and tsunami? A qualitative case study to explore doctors' altruism in medical professionalism, AMEE2014

小林智子, 錦織宏, 鈴木富雄. 医師はなぜ被災地に医療支援に向かったのか？第4回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会, 2013

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 富雄 (SUZUKI, Tomio)
大阪医科大学・医学部・教授
研究者番号：50343207

(2)研究分担者

錦織 宏 (NISHIGORI, Hiroshi)
京都大学医学部・医学系研究科・准教授
研究者番号：10463837

(3)連携研究者

小田 亮 (ODA, Ryo)
名古屋工業大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：50303920

(4)研究協力者

松井 智子